

神様お願い!

2

「神様のトバッチリで
異世界に転生したので
心穏やかに
スローライフを送りたい！」

きのこのこ
Kinokonoko

Illustration: 吉夢いちゆ。

アネット

ナユタの肉体の母親。
とある帝国の皇后だが、呪いを受ける。

ランガルト

アネットの父で、
グラキエグレイベウス公爵家当主。

ティーモ

ランガルトの養子。
ナユタを弟のように可愛がる。

ツクヨミ

ナユタの左目に宿る神様の欠片。
ナユタから色々学習中。

登場人物紹介

石原那由多

いしはらなゆた
ひよんなことから、異世界の
とある魂なき肉体に魂を宿らせ転生した男性。
左目に入った神様の欠片をバートナーに、
自由気ままに異世界を生きること。

カーバンクル

ナユタに助けられ、
行動を共にすることになった幻獣。

第一章 辺境伯と非有の皇子

非有の皇子×筋肉

俺、石原那由多はひよんなことで命を落とし、この世界に転生した。

しかも三歳児の姿で、左目にはこの世界の神様がいつの間にかちゃっかり宿っていた。

左目に宿る神様にツクヨミと名付けた俺は、前世で集めた御朱印を通して日本の神様から力を借りる固有スキル——【天神地祇】や、全てのスキルを使える固有スキル——【十全十美】の二つを駆使しつつ、この世界を生きることを決意する。

その後俺は、ツクヨミの案内で、かつて天空に浮かんでいた城塞都市【妖精の箱庭】という遺跡に辿り着くと、地下にあったジオラマの中の町——アンダーザローズでの生活を始めた。

近くにある【黒妖精の穴蔵】というドワーフの町にも足を運んだり、森を散策したりと、のんびりと過ごしていたのだが……ある日、この転生後の体の本来の持ち主である少年の母親や親族が、【妖精の箱庭】へとやってくる。

彼らとはある帝国の公爵の一族だったのだが、呪いによって母様は人狼の姿に、それ以外のお祖父様やその他の一族の人たちも狼の魔獣の姿に変えられていた。

俺はツクヨミや日本の神様たちの力を借りて、その呪いを解くことに成功するのだった……あ、呪いはしっかり術者に返したけどね。

そんな解呪の騒動から、半月ほど経った。

俺がこの世界にやってきて二ヶ月ほどになる。色々なことがあって、随分長くこの世界にいるような気もするけど、まだ二ヶ月くらいなんだよなあ。

季節は、若葉に風吹き抜け薫る頃、と言ったところか。風が気持ちいい。

ツクヨミ曰く、【妖精の箱庭】は、気候さえ操作することが可能だが、今は外界周囲の季節に合わせる。

呪われた狼の体から人の体へと戻ったお祖父様たちは、お祖父様の指示にて役割分担を決め、俺たちの住む屋敷の運用をしていた。

流石お祖父様。采配が的確だ。

というか、お祖父様ってまだ三十八歳なんだよね。これでこんなに敏腕だなんて、流石公爵なだけはある。

こんなに広い屋敷と敷地に隅々まで人の手が入り込み、俺が浄化の魔法をかけるまでもなく、あらゆる場所が整えられ、いつの間にか屋敷の至る所に切花も飾られ華やかになっていた。さらにはレースなどのちよつとした手芸品まで置かれている。

『あの殺風景だった屋敷が、どんどん高級ホテルみたいな趣になっていってる……』

『これが本来あるべき邸宅の姿ですよ。まだ殺風景ですけどね』

俺が声に出さずに内心で呟くと、ツクヨミが答えてくれた。

これで殺風景とは……。美的感覚というものは、生まれがモノを言うのか。

美術品もそうだ。

俺は置く必要がないと思って、箆箭の肥やしならぬ空き部屋の肥やしに、壊れていなかった物を乱雑に空き部屋の一角にかためて置いてあった。それがいつの間にか、絵画や謎の工芸品、そして壺も目に煩くない配置で飾られていた。

日々趣を変えていくのは屋敷だけでなく、畑や田んぼも日が経つにつれ広がっていた。

外敵が侵入してこないで警備の者は必要がないのもあって手の空いている者がどんどん田畑を作ってくれているのだ。

手伝ってくれる方々曰く、普段使っていなかった筋肉が鍛えられて良い、筋肉も喜んでいる。とのこと。

それを聞いたツクヨミが突然、『そのうち皆さん、筋肉と話し出すのでしょうか？』とか言っていた。

それは……うんまあいいや。本当に会話してるのかもしれないし。とりあえず、日本には筋肉と会話していた人がいたよ、と肯定しておいた。

『筋肉と話せるなんて、那由多がいた世界にはそんなスキルが……』

なんて言ってるツクヨミは驚愕していたけれど。

ふふっ。筋肉は裏切らないって言うしね。

俺も鍛えてみたいけど、この歳で過剰な筋肉を付けたら、骨の成長が阻害されて背が伸びなくなってしまうので、とりあえず適度な運動で適度な筋肉と脂肪を付けることに専念している。元のガリガリな体に比べたら、見違えるようだろう。

そうそう、畑が広がったのを見て、俺も調子に乗って、記憶の森からあらゆる果物の木を丸ごと採ってきて、果樹園も作ってしまった。

ツクヨミが、『城の方に葡萄の木などもありますよ』と言っていたので探しに行き、それらもこちらへ移植した。

そして、果物の樹木が大量にあるならば、蜜蜂などの昆虫類も必要になってくる。

記憶の森に住む蜂の魔獣——森林蜜蜂と従魔契約をして、六個のコロニーを作ってもらった。巣箱は、城の葡萄畑に設置されていた、思っていたよりも数倍巨大なものを何個か貰ってきた。

森林蜜蜂は実は凶暴らしく、お祖父様たちはめっちゃくちゃ緊張していたけど、従魔契約をしたのでこの地の者を傷付けることはないと伝えると、安心していた。

森林蜜蜂的には、『凶暴とは失礼な。我らは外敵から巣を守っているだけにすぎない』って憤慨していたけどね。

従魔契約をしたおかげか、彼らの言いたいことは何となくだけど感覚でわかるようになった。ありがたいうちに蜂蜜も分けてくれるとか。

あと、聖水が湧き出る泉に山葵やクレソンを植え、ハーブ園や茶園も造った。

茶園は、記憶の森に野生種の茶の木があったから試みに植えてみたのだ。先に新芽を摘んで収納してあるので、後程緑茶を作ろうと企んでる。茶の花も摘めたら、花茶や天ぷらにしたい。

そんな、平和でまったりとしたスローライフな時間を過ごしていたある日の午後、首から下げていたクリスタル——通信魔道具が光った。

これは、『黒妖精の穴蔵』の商業ギルドの副マスターであるカリブンクルスさんに貰ったものだ。

「お？ カリブンクルスさんかな？」

カリブンクルスさんからの連絡かと、慌ててクリスタルを持ち上げ、魔力を少し込めると、人の姿が段々と鮮明に浮かび上がった。

『あれ？ マイグリンさんだ』

現れたのは、ギルドマスターのマイグリンさん。

オークションの開催地に行ってたはずだけど、帰ってきたのか。

『ナユタさん、いかがお過ごしでしょうか？ 件のヴェルミクルム氏ですが、北の帝国が混乱しているようで、奴隷を仕入れている場合ではないのか、彼が出入りしている業者でも連絡が途絶えているそうです。それと別件ですが、もしよろしければ、聖水の納品をお願いしたいのですが……』

マイグリンさんが言う『ヴェルミクルム氏』とは、先日のオークション会場で、お祖父様やティーモ兄様を売れと言ってきた奴隷商の男だ。帝国の関係者らしいということで、ギルドに調査を頼んであった。

ギルドマスターからのメッセージを観終えた俺は、折り返し、明日、【黒妖精の穴蔵】へ行くことを通信魔道具で連絡する。

この通信魔道具は電話ではなく、動画メールのようなものだった。これなら手が空いていない時でも、あとで見れたりするので中々良い機能だ。しかし……

『北の帝国が混乱とは……』

『やはり国を動かす者の中に、呪い返しを受けた者がいたということですね。一応、元公爵たちにも伝えておきましょう』

『そうだな。急いで知らせよう』

狩りに出ているお祖父様たちのいる場所をツクヨミに特定してもらって、一気に転移で飛ぶ。

「……!! 突然どうした? ナユタ」

目の前に忽然と現れた俺を、ちよつと驚いたお祖父様が目を白黒させてキャッチしてくれた。

「お祖父様! 突然、失礼いたしました。実は先ほど……」

マイグリンさんから聞いた話をし、明日、【黒妖精の穴蔵】へ行くことを伝えた。

「……そうか、帝国が混乱に。……しかし、今の私たちはナユタの臣……ナユタが我らの国であり、支えるべき主君なのだから、帝国を気にすべきではないだろう」

お祖父様は葛藤しながらか、自分に言い聞かせているのか、視線を少しだけ彷徨わせ俺にそう言った。



そんなことを言っただけで、きっと生まれた時から貴族として国を護る、という前提で教育を受け育ってきたお祖父様たちだ。そんなすぐには、国の一大事と知って無視できるはずがない。

【黒妖精の穴蔵】へ行く度、北の帝国の噂をしている人に、狼の大きな耳を傾けて話を聞いていたのはわかった。

だから俺は、最強のカードを切る。

「ならば、北の帝国、私が生まれた大地を、私のために平定してください。明日【黒妖精の穴蔵】へ行き、北の帝国の情報を一緒に聞きましょう。那由多のお願いです」

「ナユタ……。御意に……」

そして小さく、「……ありがとう」と、言われた。

いえいえ。

あとは母様にも伝えようと転移しようとしたところで、その場に母様がいることに気付いた。

え？ 気が付かなかったのですが。

思わず二度見をしてしまったが、髪を束ねて男の格好をしているのは、紛うことなく母様だった。片手に魔物の血らしきものが付いたレイピアを持っている。

「母様も……狩りをしていたのですか？」

「ええ。ここ数年、お城に籠って運動をしていなかったのです、お父様と共にならば、と許していたのです。城下町に行った時、ナユタにお小遣いを貰ったでしょう？ 良い感じの剣がありましたの。光りますのよ、この剣」

そう言いながらレイピアを日に掲げ、うふふ、と楽しそうに言う母様。

「光の剣と名づけましたの」

気になったので剣を鑑定してみたら……

▼レイピア

聖属性の細身の剣。アンダーザローズの鍛冶屋さん【踊る火蜥蜴】の掘り出し物！

魔を切り裂き邪を払う。

魔物や魔獣に特化。

光の魔石はこまめに交換しよう。

母様はおっとりとしながらも芯のある貴婦人だとは思っていたけど、ただの戦闘民族でした。実家の家紋が、盾と剣と魔法の杖だもん……。どうやら魔法が使えなかった母様は、お祖父様のように強くなりたいと、幼い頃からお祖父様から剣技を任込まれていたそうで、かなりの腕前らしい。

それを聞いて慌てたのが、前皇帝のお妃様。

将来的に母様が皇室に入ることをわかっていたため、女子がやる裁縫や手芸、お茶や家政を教えてくれたそうだ。

ただ当の母様は、剣技の方が楽しいし、適度な運動で体が引き締まるからそちらの方が良いとか

言っていたらしい。

母様は、筋肉は裏切らない派閥の一員だった。お祖父様やその他ここにいる方々も、うんうんと頷いているのを見るに、やはり筋肉は裏切らない派閥の一員のようだ……その血がこの身に入っているのか。

俺は何とも言えない複雑な思いを抱きつつも、母様に明日の予定を聞き、【黒妖精の穴蔵】へ同行してもらうことにした。

母様の未来を予知する能力、【糸を紡ぐ者】によると、多少気になる点はあるものの、特異なこととは起きないそうだ。

とりあえず、明日【黒妖精の穴蔵】の商業ギルドに行く準備をしながら、緩やかに一日が過ぎていった。

非有の皇子×脳筋

翌朝。

【妖精の箱庭】内の泉に湧いた聖水をたっぷりと水瓶に入れて収納し、みんながいる屋敷に転移する。

朝食は、早めに出ると伝えてあったおかげか、森林蜂蜜たっぷりのパンケーキがすでに用意され

ていた。

至れり尽くせりに感謝しつつ、手早く食事を終わらせ、手早く身支度を整えて、同行するメンバーと共に地上に出て、そこから【黒妖精の穴蔵】の近くまで転移した。

いつものように通行税を払い門を潜り抜け、昨夜獣化した母様に抱えられながら商業ギルドまで行く。

母様は、月の力も強まっている日であれば、自分の意思でもふもふな人狼の姿に変身できる。

【黒妖精の穴蔵】には帝国の関係者がいる可能性が高いので、引き続き変装した方がいいという判断だ。

ちなみにお祖父様も顔を見られないように、冒険者風の装備と顔を隠すようにマントのフードを深く被っている。ティーモ兄様は、まだ寝ていたので無情にも屋敷でお留守番だ。

今回は俺と母様、お祖父様の三人だけだね。

商業ギルドの受付まで行って名を告げると、話を通っていたのか、商談部屋に案内された。

マイグリンさんが来るようで、待つてるついでにお祖父様たちが狩った魔物や、俺が採取した素材などを買い取りに出しておく。俺たちが話している間に鑑定と査定額の算出までやってくれるだろう。

少し待つと、控え目にノック音が聞こえ、マイグリンさんがやってきた。

「お待たせいたしました。当ギルドに足を運んでくださり、ありがとうございます。ナユタさんが

おっしゃっていた北の帝国の情報ですが、北の帝国の商業ギルドに問い合わせたところ、解答をいただけたのですが金額の方が……」

「値段は、少々高くなっても構いませんよ」

その国に属するギルドが国の情報売るのだ。情報に応じて高くなるのは仕方がない。

「かしこまりました。実は今回の聖水も、北の帝国の商業ギルドから発注された物です。どうやら、国政に関わる高位貴族が呪われたとの情報があります。これは北の帝国の旅人らも知っていたことなので、公然の秘密といったところでしょうが……あとは、こちらの資料をお読みください」

「ありがとうございます」

俺は北の帝国の情報載った資料を、人物鑑定除けのために俺の背後にびったりついて聖域結界——魔物や悪意あるものを通さない結界の領域に入ってもらっているお祖父様に渡す。俺が読むより、お祖父様が読んだ方がいいからね。後でみんなの前で情報共有してもらおう。

そして、引き換えるようにお祖父様たちを呪った相手に売るのは業腹だが、聖水をマイグリンさんに渡した。

情報料に大金貨一枚ほどの出費があつたが、聖水は、水瓶一杯分が大金貨五枚になった。差し引き、受け取りは大金貨四枚に。

聖水は元凶の貴族に行き渡る頃には小分けにされ、数倍、数十倍の値段になっているだろう。国庫金が使われないと良いけど……

そうこうしている間に、買い取りの査定も届いた。

お祖父様が出した買取品の目録と代金をお祖父様に渡し、自分の分も確認する。

葉草	250本	銀貨2枚、大銅貨5枚
解毒草	120本	銀貨1枚、大銅貨2枚
コカトリスのたまご	10個	大銀貨1枚
コカトリス	30体	大銀貨9枚
レッドサーペント	8体	金貨2枚
グリーンサーペント	5体	金貨1枚、大銀貨5枚
オーク	18体	金貨1枚、大銀貨2枚
フォレストモンキー	28体	大銀貨6枚
アラクネ	6体	大銀貨2枚
ブラウンドレント	8体	金貨2枚
レッドレント	10体	金貨3枚

合計で、大金貨一枚、金貨一枚、大銀貨五枚、銀貨三枚、大銅貨七枚で1153万7千リブラと
なつた。

聖水と合わせて、5153万7千リブラ。聖水の希少性が飛び抜けている。

トレント類は、家具や木工細工などで消費されるので特にありがたがられた。

樹木ばかりどうかなどは思ったが、良かった。お社の建材を……と思って色々狩ったので、小出しにしよう。

あ。商業ギルドでのランクも、聖水を卸してくれる貴重な商人ということで、上げてもらえた。元は銅板だったんだけど、プラチナ製のものになった。やったね！

これで、自由に商会を作って、街で屋台や店舗を持って経営できるようになった。他にも各国の商業ギルドでちょっとした優遇が受けられるとか。ちょっと嬉しい。

用は済んだので、次回の聖水の納品の日付を決めて、商業ギルドをお暇した。

そのまま足早に孤児院へ寄り、寄進をしてから、とりあえず何箇所かの武器屋で各種武器をお祖父様が見繕い、アンダーザローズへ帰宅した。

母様は武器屋で、モフモフの手に合う聖属性の効果が付いた厳ついグローブをニコニコ買っていたよ。

……いつぞや言っていたぶん殴るための準備が成されている。一体誰をぶん殴るのか……いや、深く考えるのはやめよう。

帰宅したら、置いていかれたティーモ兄様が若干むくれていたが、お祖父様からお土産の子供用の剣と焼き菓子を渡されたら、機嫌が直っていた。

昼食時に一族全員が集められ、お祖父様の口から、北の帝国の情報が伝えられた。

お祖父様たちが国を出たあと、魔力の高い者や、魔法学院の魔力が高かった生徒たちが、糞女神

の教会に取り押さえられ、どこかへ連れていかれてしまい連絡が途絶えたこと。

奴隷商人の出入りが盛んになり、どこからか連れてこられた妖精族などの魔力の高い者たちが、一ヶ所に集められていること。

ある日、国を強い光が通り抜けた時があり、その時から貴族の動きがおかしくなったこと。

皇帝についていた貴族が、全く表に出てこなくなったこと。

何かにつけて出たがりの新しい皇妃も出てこなくなったこと。

貴族たちから各ギルドに聖水を求める声が多くなったこと。

経済的には、都市部の一般市民たちにはまだ変わりないが、一部の警ら隊が機能せず、緩やかに治安が悪化していること。

自主的に騎士団などが動いてはいるが、日が落ちる頃には街に人の往来が少なくなってきたこと……など。

「聖水を欲するということは、おそらく呪い返しを受けた者が使っているのだろう。それほど、ヴァニタイン公爵に加担した貴族が多いということだ。逆に呪われていないということは、奴らに与してはいないということ。呪い返しを受けた者たちがどのような状態になっているかは、わからない。同じ獣に成り果てたか、または違う何かになったのか……一度は国から逃げた身なれど、それでも国を思う我らの想いを汲み取りヌタが……いや、ヌタ様が、私に国を平定しろと仰せられた。皆の者、ついてきてくれるか。我らが国の憂いを断つために。我が主の御心のままに」

「……是！ 我らが国の憂いを断つために！ 我が主の御心のままに」

すべての者が快諾してくれ、全員一緒に北の帝国へ行くことになった。
なんかしれっと、様付けされてるけど。

さて。ティーモ兄様はうんうん頷いているが、ちょっと危なっかしいな。

俺もみんなと行きたいところだけど、俺をこの世界に転生させた糞女神には見つかりたくないし。

【妖精の箱庭】もどうするか……。

『【妖精の箱庭】は、【無限収納】に収納したら持つていけますよ？』

『は？』

そう言われれば、俺のスキルの収納は【無限収納】だったよ。東京ドーム何個分みたいなの、

【妖精の箱庭】を入れるとかいう、ダイナミック収納が思いつかなかったただけだけど。

『もし将来的に、城の一室が使えるならば、その部屋にジオラマ部屋を嵌め込んでしまえば、今までと変わらず使えますし？』

『え!?』

『糞女神』とは、那由多の天神地祇で縁切りが済んでいますし、今はどこに居るのか把握されていないはずですよ。那由多は膨大な魔力を抑えて、私も魔力でバレないように、那由多の内面……記憶の深層界に入り込んで目眩しの魔法をかければ探知はされません。その上で、那由多か他の者が物理的に彼奴の教会をぶっ潰していけば、弱体化させられるでしょう。奴は基本、色々抜けてますから、私たちの作業とは気付かないでしょうね』

糞女神のことを、間抜けとでも言いたいのか。

なら俺もお祖父様たちについて行って、ティーモ兄様に俺の護衛を頼めば大丈夫かな？ 母様たちは先陣切って、まずは帝城を制圧するだろうし。

俺は教会を収納して、内部空間で解体スキルを使って解体して、資材やら建材やらを教会跡地に吐き出せば楽に壊せるだろうな。

うん。なんか……いけそうな気がしてきた。

ツクヨミの先導によって、母様から受け継いだ、うっすらとした脳筋一族の考えが若干見え始めたことに気付かず、俺は北の帝国に渡る準備を始めたのだった。

あ。ついでお祖父様には、俺に対して敬称はやめるよう伝えた。

俺は役職もない、ただの幼気な幼児ですから！

非有の皇子×隊商準備

さて。北の帝国に行くこと決まれば、まずは準備だ。

お祖父様に帝都までの大まかな地図を書いてもらい、糞女神の教会の位置など、わかる範囲で教えてもらった。驚くことに、糞女神の教会は帝国内でお祖父様が知っている範囲だけでもかなりの数があった……

あとは、ツクヨミの領域である記憶の森を抜けたあと、どうするかだ。

四十人以上の世帯というか一団を、どう旅人っぽく、目立たないようにするか。旅をする下級貴族ならば、護衛などで四十人程度の小隊が組まれることもあるようだが、どこぞの誰それと調べられても危うい。旅芸人の一座なども、この面子では厳しいであろう。そこで考えたのが隊商だ。

丁度俺の商業ギルドカードも、グレードが上がって屋台などの店を出せるようになってる。そして俺のこのカードを見れば、従業員や護衛は、そのまま何かあれば俺の責任にはなるもの、国や街に取り調べもなくスルツと入れるそう。なんというザルな警備か。旅の商人を装い、あとは護衛として配置すればいいだろう。

肝心の商品は、アンダーザローズの街と【黒妖精の穴蔵】から仕入れられるし、魔物の素材や、俺が【黒妖精の穴蔵】行きの道中で発掘して溜め込んだ鉱物なども豊富だ。

宝石類は原石でも良いけど、カット図形を書いて、【黒妖精の穴蔵】で工房を持っているノーリさんやイーヴアルさんに宝石をカットしてもらってアクセサリーを作るという手もある。

『作ってもらう前に、商業ギルドで登録しておいた方が良いと思いますよ』
『それもあつたね』

宝石のカットは、前に博物館で何々朝貴族の暮らしとジュエリーの歴史みたいな催し物を見に行った際に、計算された図形が面白かったから何個か覚えてる。

この手の特別展とか映画や絵画は、この世界で物作りをする参考になった。貴族の男女が着る衣装や宝石、美術品なんかのね。

ただ衣装類に関しては、この世界に工業用ミシンがあるのかはわからない。手縫いだったら数ヶ月かかってしまうので、宝石のカットだけ注文しよう。

それと、交通手段に馬車が必要になる。

ツクヨミに聞いたら、魔道具的なエンジン搭載の自動車や車のような物などは開発されていないので、移動は馬車か馬、そして従魔に限定されるそうだ。まあ用意できるだろう。

なんなら、道ゆく場所で軽食を売るキッチンカーとして、それ用の馬車を用意しても良いかもしれない。

あとは馬車を牽引する馬、それから護衛役が乗る馬が必要だ。

街と街の間を転移でショートカットしても良いけれど、糞女神に察知されるのは避けたいし。

そうと決まれば、宝石カットの図形を書いて【黒妖精の穴蔵】に持っていこう。

馬車もあると良いんだけど……

『馬車は受注販売ですから、急ぐなら中古店などを見て回った方が良いでしょう』

『なるほど。中古店か……』

平屋に引きこもって、ひたすら記憶にある限り宝石カットの図形を書く。

天面のテーブル部、サイドのクラウンガードルにパビリオン。下部中心部のキューレット。一つ一つの面を丁寧に書き込んでゆく。ダイヤモンドでお馴染みの、屈折率など緻密に計算された五十八個の面が美しいブリリアントカット。七十六個の面が煌めくプリンセスカットなど。

この世界は、丸みを帯びたカポションカットや花など立体に彫られた物が主流だそうだから、

きつとドワーフたちも面白がってくれるに違いない。

図面を描く合間に、中世から俺がいた時代までの年代ごちゃまぜ衣装や装飾デザインを、下手くそながらにちまちまと書いた。

何枚か記憶の中の衣装のデザイン画が溜まった頃、母様が夕食に呼びに現れ、下手くそなデザイン画を見て、「素敵ね」と、言ってくれた。

元世界の衣装の概念は、この世界でも通じるのか。

「ちよっとお借りして良いかしら？」

母様はそう言って持って行ってしまったけど……女性陣に見せるのかな？

その後、【黒妖精の穴蔵】^{ブラックフェアリースエツバ}に行き、宝石のカットや宝石を嵌め込んだアクセサリー一式をイーヴァルさんとノーリさんに注文したり、中古馬車を探したりと過ごした。

見つけた中古馬車の乗り心地改善としてスプリングを仕込むため、家具職人のドウリンさんにもお願いしたら、面白がって内装改修と共に請け負ってくれた。

馬については、力強い種はとても値段が高かったので悩んでしまった。するとツクヨミが、『記憶の森のはぐれ馬を探しに行きますか？』と提案してくれて、お祖父様たちとツクヨミの案内で馬を探しに行った。

ツクヨミが見つけてくれたのは、ほぼ魔獣化している馬で、【グラニ】と呼ばれる賢い灰色の魔馬だった。魔馬というのは、魔力を持った馬だ。

馬に乗る者や御者などを筆頭に、お馬さんと筋肉と筋肉のぶつかり合いというお話し合いの末、無事全員が従魔契約に成功。【黒妖精の穴蔵】^{ブラックフェアリースエツバ}の商業ギルドで一時的に俺名義の従魔証明を作った。

魔馬^{グラニ}たちは出番まで、アンダーザローズの広い草原で自由に過ごしてもらっている。

彼らを使役している人たちが、聖水をあげたり果物をあげたりして可愛がっていた。

さらに数日後、母様が数点の衣装を持ってきたのには驚いた。

いつぞや母様を持っていた俺の下手くそなデザイン画より数段洗練されており、カラーバリエーションもある。

「すごい……」

「ふふっ。ナユタがいた世界のデザインは目新しいものばかりで、とても良いと思っただけです。これは絶対上流階級の方たちにも注目されるわ」

俺より商人が向いているのではなからうか？

この数日でどう仕上げたのかと思ったら、手芸に特化したスキルを持った方が三人いたらしい。そういうえば、母様たちや俺が着ている服も知らないうちに当初より増えていた。買っていたと思っただけ作っていたのか。

「こちらを服飾ギルドに提出して、デザインを登録しましょう」

母様がそう言い、早速【黒妖精の穴蔵】へ行き、俺が服飾ギルドの登録をしてデザインの登録を済ませた。

俺じゃなくて母様たち自身で登録してもらっても良かったんだけど、母様たちを登録する時、情報がどう出るかわからなかったからね。

さて。

馬車は、衝撃吸収のスプリングと夜は寝台にもなる座席を仕込んだ二台のベルリン馬車調の大型改造馬車を作った。

他にも中で調理ができるように改造した屋根付きのキッチンカー型馬車一台、商品を積むと見せかけたキャンピングカー仕様の店舗にもなる改造荷馬車三台を用意して、計六台だ。

そして護衛が二十人。魔馬は、もしもの時の裸馬を合わせて三十五頭の大所帯だ。

馬具などを含め、数億の金が飛んでいっている。

絶対取り返す！ という勝負師に多い戯言を胸の片隅に秘め、俺たちの北の帝国行きの準備は着々と進むのだった。

非有の皇子×国境門

中古馬車自体には元々、サスペンションというか、木の葉型をした金属製のリーフスプリングのようなものが組み込まれていて、震動の軽減機能が付いていた。ただ、中古品なので金属疲労してないかを見てもらって、馬車の箱部分の座面にも衝撃吸収のスプリングを仕込んでもらった。

お値段は改造費込で、一台3500万リブラ。本物の高級車だ。それが二台。

キッチンカーの方も、炊事機能の他にスプリングが利いた座面などの特殊改造をして、3200万リブラ。荷馬車兼店舗になる方は、寝台など生活に必要な機能も詰め込んで、一台3000万リブラが三台。

軒並み高級車だ。すべての馬車に軽量化の魔法陣が組み込まれており、それも高い一因になっている。

あとは商品の仕入れ、食品の仕入れ、旅の生活に必要な物や消耗品、馬具に飼い葉の仕入れなどなど。那由多は、金銭感覚がわからなくなってきました。

そういえば、俺の身体が記憶の森に捨てられた時、三人の兵士が軍馬で一日ほどかけてやってきたとツクヨミから聞いていたので、帝国の首都も近いと思っていたんだけど、そうじゃないらしい。

お祖父様曰く、金を積み使えらる転移門という物が各地にあるそう。貴族や商人がよく利用しているとか。

それじゃあ母様やお祖父様たちが帝都から逃げる時にも、それを使ってこの近くに来たのかと思いきや、帝都から一番遠くに行く転移門へ、這々の体で飛び込んだらしい。

警備兵を威圧して気絶させたから邪魔されなかったとかお祖父様は言ってるけど……母様も同じようにしたのかな？

「獣化した時にもしやと思って、お父様の真似をしたらできたのです」
聞いてみたら、キリッとした顔でお祖父様に言った。

お祖父様が、素晴らしい戦闘感覚だつて絶賛してるし、母様は母様で、「お父様の子ですから、これからも精進いたしますわ」とか喜んでる。

うん。母様は褒められて伸びる子なんだな。俺が勝手に抱いていた貴婦人像がどんどん崩れていくよ。

話が逸れたけど、転移門は貴族が使うつてことなので、警備もしつかりしている。

お祖父様たちの顔を知っている人も多いだろうし、帝都までは馬車での移動だ。

荷物は俺が粗方収納するが、移動速度は馬車を牽引する魔馬の脚にかかっている。

帝国の軍馬は、縮地という高速移動のスキルを持つていらしいけれど、魔馬はどうなんだろう。

彼らの脚は太く、身体はでかい。筋骨たくましく、どこかの霸王が乗つていそうな馬である。北海道のばんえい馬を思い出す。が、主観だが、ばんえい馬より脚は長いと思う。

従魔契約の折に、お話し合いという力と力のぶつかり合いをしてたし……見たところ相撲のようだったけど。力自慢の馬のようだ。

たまに主従で力比べをしていて、一方が負けると次の対戦まで主従が逆転するという遊びまでしていたし。馬たち同士でもじゃれ合い、追いかけてっこなどをしてる。体力も充分にありそうだ。

俺がいた地球の知識となるが、馬車移動は、常歩——人がジョギングする程度の速さで二時間進んでから休み、また進む……という流れだったらしい。この世界はどうなんだろうか。

お祖父様たちも元々転移門で移動することが多いから詳しくはわからないそうだが、おおよそ通常の馬車移動ならば帝都まで一月、二月以上かかるのではないかとのことだ。

なので一般市民は、特殊な従魔がない限り、滅多に気軽に旅行をしないと聞いた。ちなみにこの世界には、空を駆ける従魔もいるが、一般的ではないそう。

どうせ時間がかかるなら、赴いた先々でお祖父様たちを呪つた相手の暗黒情報を垂れ流してやるうか。

あとは、お祖父様たちを変装させるためのアイテムを購入した。目の色と髪の色を変えてくれるイヤーカー型の魔道具で、35万リブラが四十八個。コレも地味ながらも高額に。

商人役はお祖父様で、国境を抜ける際は、ちよつとした高級商品を取り扱う成金商人風な、俺がデザインを描いたスーツにアスコットタイをしている衣装を一時的に着てもらう予定だ。母様は変化のまま革鎧を着て護衛役、俺とティーモ兄様は今の楽な服から着替えて商人の子っぽい服になる。

お祖父様はちよつと貴族的というか、威圧感があるしカタイからなあ。ちよつと心配だけど。母様にも獣化後のオシャレのために、砕けた小さな宝石や宝石の粉で、簡単な花のネイルアートをしたらとても喜んでくれた。

売る物の準備も完了したので、【妖精の箱庭】をダイナミック収納し、数ヶ月過ぎたこの地に別れを告げる。

ちなみに、森林蜜蜂の従魔契約は一旦終わらせてある。記憶の森の、花が沢山咲いている良い感じの場所に棲家を作り、また落ち着いたらお仕事お願ひします、とお願ひしてお別れした。アンダーザローズに実つた野菜や果物は片っ端から収穫し、聖水の泉の水もできるだけ収納して、

【妖精の箱庭】内の時間を完全に停止させ、シオラマごとダイナミック収納したのだった。

収納したあとの【妖精の箱庭】跡地には、ポツカリと大きな穴が空いていた。数ヶ月後、この地がどうなっているのか楽しみではある。

あとは、近隣の街道までの転移だけ……記憶の森のノートメアシュトラールセ帝国に一番近い場所をツクヨミに探してもらってそこに転移することにした。

ただ、この大所帯全員をまとめて転移させると、端っこの人がいないとか起きそうでちよつと怖かったので、六組くらいに分ける。

まず一組目を転移し、他に人気がないか様子を見て、荷馬車など収納していた大型の物を出したり、魔馬グラニを繋いだりと出発の準備をしよう。

その間にすべての人馬を転移し、山越えをしたらノートメアシュトラールセ帝国入国となる。

入国の際、俺の商業ギルドカード一枚でなんとかなるとはいえ、ちよつと不安だ。

馬車に乗り込むと、魔馬グラニたちは嫌がらず軽快に走り出し順調に山を越える。

魔馬グラニたちの速度はなんというか……思っていたより……いや馬車が壊れてしまうのではないかと思っくくらい随分と速い。

車窓の風景の流れが尋常じゃなかった。

ちなみに、馬や馬車自体が高級品なので、山賊などの無頼漢にも気を付けなければならないから、広域に鑑定の最上位スキルである【神眼しんがん】を展開してある。

山を越えるまでに一度だけ、【神眼】の視界内に赤い危険色——敵がいる証が出たので、護衛役の人たちに報告し、先回りして討伐してもらった。

捕まえた賊たちは、生涯使わないと思っていた捕縄術のうち、唯一知っている動く首が締まる縛り方で捕縛した。

死んだ者たちは俺は恐ろしくて見られなかったが首をとり、改造荷馬車の後ろにある飼葉桶おけに入れようとした……ところで、魔馬グラニたちが耳をイカ耳にして鼻に皺しわを寄せて怒り狂ったので、あり合わせに作った檻に替え用の車軸と車輪を取り付けた、不恰好な檻車ぶかっとうに放り込んだ。

魔馬グラニたちは賊の檻車を牽くことをめっちゃ嫌がっていたけれど、もしも要員の魔馬グラニに拝み倒して引いてもらい、ほど近い国境で引き渡す予定とした。

日が落ちる少し前には山を越え、国境に配置された兵が護る国境門まで来られた。

とんだ爆速で、賊たちを押し込んだ、あり合わせで作った檻車が壊れるかと思つたが、何とか壊れずに国境門まで来ることができて一安心だ。

何泊か山で野宿をする想定だったのだが、魔馬グラニの健脚を侮っていた。もしかして縮地のスキルを持つているのか？

お祖父様じいの魔馬グラニで、改めてちゃんとステータスを見てみると……

▼グラニ ぶ

名前 ウィンクス（ランガルト・カルテンボルンIIグレイエグレイペウスの従魔）

年齢 4歳

忠勇義烈の馬。忠誠心に勇気を兼ね備えた賢い駿馬。

幻獣【滑走する者】の血を引く。筋肉自慢。

固有スキル

筋肉パワー、筋骨隆々、筋肉強化上等！、筋肉こそがすべて！、筋力で空も飛べるはず！

縮地ではなく、マッスルパワーって身体……否、筋肉強化してたのか。お祖父様たちと気が合うはずだよ。筋力で駆けていただけだったのね……。

ともあれ、国境門に着いたので、検問を通らなければならぬ。

衣服を着替えた成金商人風のお祖父様を抱っこされ、ギルドカードを持ちたい無邪気な幼児を装って、お祖父様と共にカードを魔道具の上に置きしばらく待つ。

この魔道具は、本物のカードの持ち主なのか犯罪者か調べる鑑定用のものようだ。

この待つている間が緊張する。

カード情報が異様に少ないので、門兵が実際に【黒妖精の穴蔵】の商業ギルドに問い合わせをし、本物のカードで商人ということが保証された。危ない危ない。

マイグリンさんに、帝国に商売をしに行くと言っておいてよかった。

門兵が、疑ってすまなかったと、今後このようなことがないように、帝国で使える通行時に必要

な書類を発行してくれた。もしや優しい？

それから人数分の通行税を支払い、無事に国境門を越え一同一安心した。

捕まえた賊たちも、ギリギリ壊れなかった不格好な檻車ごと門兵に渡してある。予備の車輪と車軸だけは、高かったから返してもらったけど。

賞金などもいくらか貰えるようなので、そちらは商業ギルドの口座に振り込んでおいてほしいと残して、緊張続きの国境門を足早にあとにした。

門兵に顔見知りがあった人もいたようで、馬車に引っ込んだりとなんとか長い間顔を見せないようにしてみたかった。

日が落ちる前に、国境門から少し離れた草原で今日の野営場所を設営することにした。

山越えを一日でやってのけた魔馬たちを労う。

それに俺たちも、休み休みとはいえ、一日中狭い箱の中にいたので身体がカチコチだ。スプリングが入っていない椅子だったらと思うとまた恐怖である。

ツクヨミは糞女神に見つからないように、山を越えた時点で念のため、俺の記憶の深層とやらに潜り込み、自身を俺の魔力でコーティングしたようだ。

ツクヨミが常時張っていてくれた聖域結界もなくなったので、自前の聖魔法の結界を薄く張ってみた。

常時同じ厚さで張り巡らせるのは難しく、しばらくの間帝国では、ティーモ兄様を巻き込み、一

緒に結界の練習をしながら過ごす予定だ。

俺たち箱馬車や荷馬車で移動している面々は、座面を変形させてベッドにし、そこで眠る。護衛役たちはそれぞれ自分たちが眠るテントを張っている。

俺は、頑張ってくれた魔馬たちに新鮮な草と穀物、そして聖水を与え、おやつに記憶の森の果物をあげて労った。その後も魔馬たちは、草原の雑草ビュツフェを楽しんでいた。

その間、公爵家の使用人たちが、キッチンカーとして改造した馬車で調理を始め、良い匂いが漂い始める。

料理を得意とする使用人の中には、とある伯爵家の次男で騎士のクヴァルさんという人がいる。

彼はケーキ作りが上手かったり、かなり手の込んだ料理を作れたり、料理の腕前が素晴らしいのだ。

そんな彼らは、以前教えたカレー作りを実行しようだ。

野宮キヤンと言ったらカレーって俺が言ったからかな？ ついでにブラックボアの肉で豚カツやコカトリスのから揚げ、素揚げの野菜などの付け合わせも作っている。

カレーにできる最低限の香辛料スパイス、ターメリック、クミン、コリアンダー、チリの配合を教えたら、クッキングチームの女性陣がハマっちゃって、独自にスパイスやハーブを足して研究をしまくってるみたいだ。

そうして夜の帳とほりが下りる頃、辺りにランタンの魔道具とテーブルや腰をかけられる丸太を配置し、

みんなでカレーを食べた。

素揚げした野菜や、カツ、唐揚げなども自分で好きにトッピングできるので、みんなで絶賛し野外の食事を楽しんだ。たまに明かりに釣られて害のない虫が来るが、そこはまあ野外の風情ということだ。

しばらくすると、遠くからさっきの国境の門兵が数人馬でこちらにやってきた。

何かあったのかと、みんな緊張し、自分の剣をそと寄せて身構えたが、どうやらカレーの匂いに釣られてきてしまったようだ。

「その食べ物売ってくれ」

だつてさ。

お祖父様じいちゃんが、持ち場を離れた門兵たちに若干怖い顔をしつつも仕方がないとため息をついてクヴァルさんに頷く。

結局、パンか米か選んでもらって、カレー一皿分は俺が設定した値段500リブラで、唐揚げは一つ100リブラ、豚カツは300リブラ、素揚げ野菜はお玉たまごに一つ200リブラで販売した。

門兵の方々は美味しい美味いと、各々五杯くらいガツガツ食べて帰っていった。作る方も大変である。

香辛料やハーブは、記憶の森でも採取できたのでこの価格だが、あとでクヴァルさんに「値段設定が安すぎる！」と言われてしまった。反省。

しかもその後、帰った門兵の話聞き付けたのか、夜も遅いのに他の門兵たちがわらわらと、光

に集まる虫のようにやってきた。

これはチャンスなんじゃないかと思ひ、酒も少しだけ無料で提供し、帝国の様子を聞いた。門兵たちは酒で気を良くしたのか、べらべらと喋しゃべってくれた。

どうやら、皇帝が代わったからと言って上からの編成変更などの連絡はなく、前皇帝の時と同じく、国境の運営をしているようだ。異動もないため、帝都の様子は詳しくは知らないそうだ。

お祖父様は、持ち場を離れてここまで来た時から門兵たちに怒っていたけれど、前皇帝の時と変わらないというところでハツとしていた。

新皇帝になって、編成や運営が全く変わらないはずがない。

その時から……いや、それ以前にもう末端への指令系統が消失しているか、そもそも連絡がつかなくなっているのかもしれない。

もしかすると給料も出ていないのではと考えたようで、お祖父様は寄付まで申し出していた。

門兵たちは頭になぜ？ という疑問が浮かんだようだが、とりあえず了承した。

その後、上司を呼んで来るという彼らをお祖父様は止めて、貯めていた金銭の約半分を、「このカードと共に……」と言って渡していた。

カードには独特なサインが書いてある。

「上司とお知り合いですか？」

そう門番が問えば、お祖父様は古い知り合いだと答えていた。

門兵はお祖父様に敬礼をし、大切に金袋と手紙を抱えて去っていく。

やがてカレーを求める門兵たちが来なくなり、後片付けをして、明日の朝食の簡単な仕込みをして、キッチンカーを閉めた。

夜間は護衛役の人たちが交代で見張りをしてくれるようだが、俺も寝ながら結果が張れるように意識して、薄く聖結界を全体に張ってみた。

日課になったツクヨミへのおやすみの挨拶をして目を瞑る。

明日は本格的に帝国内の移動となる。どんなことが起こるのか、不安と楽しみが半々といったところか。

お祖父様はテントへ、俺とティーモ兄様、そして母様は仲良く川の字で箱馬車の即席ベッドで眠った。

閑話〜夜の訪問者〜

「お父様、失礼します」

「どうした？ アネット。ナユタとティーモは？」

「二人共寝ております」

三つ子の月が中天にかかる少し前、子供たちと共に馬車へ入ったはずの娘——アネットが、我、ランガルトの元へやってきた。

獣の身体に白い毛を纏った我が娘を見る度に、帝城での娘の状態に気づかず、あまつさえ気がふれたなどと思い込んだ、己自身への怒りと贖罪がないまぜになる。

あの時、誰にも相談できず、一族すべての命を背負うこととなっていた娘は、どれほど嘆き苦しみ葛藤したであろう。

獣人化を受け入れ、今は望んでそうあり続けるのであっても。簡単にはできないと知りつつも、もう一度、ナユタに縋ってでも、娘の呪いを解いてほしいと懇願したくなる。

「夜分に申し訳ありません。とても大切なことなので……手短にお話します。今から数刻後、来訪者が現れます。その者は、お父様に吉報を齎す者でございます。邪険に扱わないようお願いいたしますね」

「スキルか。邪険にするなど……もしや」

ハッと思い出し、娘に目を向けると「コクリと頷く。

「では、お父様、おやすみなさいませ……良い夜を」

「おやすみ、アン。良い夜を」

私は、ゆらゆらと尻尾を揺らめかせ馬車へと戻る娘を、複雑な気持ちで見送った。

仮眠から覚醒し、衝動的に護身用の短剣を突き出す。

「うわっ！」

「……………」

相手は尻餅をついたのか、「痛てて」と、声が聞こえた。

手元にある光の魔道具を点けると、少し年老いた見知った顔が、痛みに顔を歪めながら片手を上げ、気安く声をかけてきた。

「よっ！ 久しぶり」

「犯罪者でも捕まえにきたのか？ ダリル辺境伯殿」

その人物は旧知の仲である、ダリル辺境伯だった。国境を管理するのもこの男である。

「捕まえてほしければ捕まえるけど、俺一人じゃ、お前一人を捕まえるのすら苦労するなあ。そう言えばお前、いつから商人になったんだよ？ 兵士たちが、飯がうまかつたとか砦で盛り上がったいたそっだが」

ニヤニヤと、相変わらず嫌な笑いをしながら聞いてくる。

「商人は孫だ」

「はあ？ 孫!? お前、皇后は子供を産んでいないだろ？ 孫なんて……はっ！ まさかつ!! 婚外児が子供をうっ……」

とりあえず、すべてを言い切る前にこの愚か者を殴っておいた。

不本意だが、ダリルとは私が帝国魔法学院に入学した時からの腐れ縁だ。

よく氷のグラキエグレイベウス、土のダリルと言われたものだ。ダリルは辺境伯を継いでからは、領地から一切出てきていないので、学院卒業以来になる。

学生の頃はピンクブロンドの髪を無造作に切り、年がら年中女と共にいた。

そういうえば、会う度に女が変わっていたな……まあ、細やかな配慮が足りないから振られてばかりだったのであろう。

「あーっ！　いってえ！　お前すぐに暴力に訴えるの止めろよな！　本当に犯罪者にするぞ!？」
軽く殴ったのに、大袈裟に言うのは相変わらずだ。

「本日も何も、我が一族すべてが犯罪者になっているのだろうか？　ご丁寧に側姫が、法廷で我らに得体の知れない物を飲ませ獣の姿に変えたのに、王家を謀った罪だの何だのと申しておったぞ」

「そこな！。同級にいたろ？　尋問官になった奴。そいつに話ついでに聞いたんだが、尋問官も馬鹿じゃない。側姫がグラキエグレイペウス一族に飲ませた液体を訝しがってな。一人の尋問官が液体を秘密裏に回収し、帝城所縁の組織以外の魔術研究所で調べたんだよ」

奴は珍しくも真面目な顔をして、声を潜めた。

「ほう？」

「で、結果が、とんでもなく強力な呪術がかかった、幾百人もの憎悪が蠢く液体が混ぜられ呪われた呪物だったと」

「それで？」

「それでって……いざ、ヴァニタインとその娘の側姫にお話を伺おうかと手続きをしていたところで、突然国に光が通り抜けたんだ。だいたい一ヶ月くらい前か？　それで、地下牢に収容されていたヴァニタイン公爵一家と、ソレと関係が近かった者、そして、美の女神エレオノーラを祀っていた教会の奴らが呪われたんだ」

ナユタの呪い返しはしっかりと発動していたようだ。

「狼の姿にでもなったのか？」

「否。真っ黒い何かだ。身体中に顔が浮かび上がって、それぞれが口々に、何やら喋っていてな。その内容が、自分はどこに連れていかれたかの、そこで殺されたあのそんなのばかり。黒い奴らはそんなことを一通り喋ったら満足したのか、そのまま消滅しちまった。それでその声の通りに言っていた場所を調べたら、死体だらけでな。行方不明者も遺体で見えられ、今、帝国内は教会を中心に混乱中……ってところに、お前たちが人の姿で戻ってきたってわけ」

「そうか」

「そうかってお前……」

「そうか以外に何か言葉が必要か？　我ら一族は、名も知らぬ遠縁の者まで百六十人余り、法廷へ無理やり連れていかれ、一方的に責められ押さえ付けられ、得体の知れない液体を無理やり飲まされた……生まれたばかりの赤子までだ。すぐに血を吐いて事切れた者もいた。呪われ変異してしまった我らに、魔物だと言いながら剣を向けた者もいた。生き残った我が一族は、孫を入れて五十人だ。私が感情を露わにして、失われた者たちが戻るのならば、いくらだって言おう」

「すまなかつた……」

奴は珍しくも謝り、神妙な顔になる。

そしてしばらくの沈黙のあと、思い出したように切り出した。

「あと皇帝だが……ヴァニタインに何かの薬物を投与されていてな。元々人形のような顔だったが、

頭の中も身体も、本物の人形のようになっちまってる。典医や薬師にも調べてもらっているが……どうなるか」

前皇帝亡きあとからずっと、何かしらの薬物を投与されていた可能性があるな……。

「……もしかしたらだが、ナユタが……なんとかできるのではと思うが……」

「ナユタ？ 誰だ？」

ダリルは不思議そうに首を傾げた。

「我が主君にして、商人であり、孫だ」

「はあ？ ちょっと盛りすぎじゃないか？」

「狭いテントで大声を出すな」

黙れと手で制すと、ダリルは一瞬周囲を警戒したが、そのまま声質を落とし話を続けた。

「だいたい、我が主君って……孫に誓いを立てたというのか？」

「そうだ。私たちの呪いも、その孫に解いてもらった」

「は？ 高名な解呪師なのか？ まさか、あの馬車を中心に広がっている結界も、その孫が張っているとか？」

「そう言えば……寝ている時でも、結界を常時張れるようにしたいと言っていたな」

起きていた時は結界を張っていると聞いていたが、今も結界があるのか。

「強固すぎて、入るのに苦労したんだぜ。まあ俺様にかければ、小さな綻びを見つけるのも容易いが……そうか。孫か……とんでもねえ逸材だな」

ダリルは額に手を当て、深いため息をつきながら言葉をこぼす。

そんな姿に、私は満足して頷く。

「将来が楽しみな孫だ」

「ああ……すっかり好々爺になって……あ！ あと、お前に礼を言おうと思っていたんだ」

突然下げている頭を上げ、左肩を馴れ馴れしく叩かれた。

私は叩かれた肩をはたきながら聞き返す。

「礼？」

「寄付だよ。上とも連絡がつかないし、財源ギリギリだったからよ……」

やはり私が予想していた通り、国境と俸禄を取り扱う官僚とは全く連絡が取れていなかったよ。うだ。

せっかく奴が触れた肩を払ったのに、さらに無視してバンバン遠慮もなしに叩かれ鬱陶しかったので、ダリルの手を払った。

「最初は面倒だし、転移に魔石を消費したら無駄な出費になるから帝城までは行かなかったけどな。兵士たちの俸禄が待てど暮らせど届かないし、訴えても返答がこない。税を無暗に上げるわけにもいかないし、帝城も行けずじまいだったからな……助かったぜ、恩に着る！ 本当に助かったー！」

そうダリルは嬉しそうに言うが……。

ダリルは辺境伯だが、国境門を護るのは辺境伯家ではなく、国に所属する兵士だ。なので、兵士と上司となるダリル辺境伯家の俸禄と、兵士の移動に必要な魔石は国から支給されるはずだが……。

いや、それをダリルに言っても仕方がないことか。
「構わん。自領外であろうとも国境を護るのは我等貴族の務めだ。帝国の状態はわかった。早く帰れ」

「俺、ちょっと、お孫ちゃんに会いたくなっちゃったから、朝までいて良い？」

ダリルは、両手を合わせて首を傾げるとそのたまった。

朝までということとは、こやつと一晩一緒ということになるが。

「断る」

「えー！ 出し惜しみか!? ケチ臭いぞ」

非有の皇子×辺境伯

日除けから零れる日の光が細く顔に当たる気配に、ふと目覚めた。

ここは……？

ボーツとする頭で周囲を見回すと、目の前に拳が見える。

……えーと。

ティーモ兄様の拳が俺の頬を直撃し、俺の長いとはいいがたい右足が、ティーモ兄様の鳩尾にめり込んでいた。

うつらうつらした寝起きから徐々に覚醒し、ここが馬車の中だと思いつく。

きっちりお腹の上にかけて毛布も、端の方へ追いやられていた。どうやら昨夜は寝ながらにして大運動会だったようだ。俺の左にいた母様はすでにいない。

コシコシ目を擦りながら馬車から出ると、護衛代わりの……なんと言ったか……そうだ、エルノさんだ。がっしり体型のワイルド系なエルノさんが朝の挨拶をしてくれて、温かい濡れた手巾で顔を丁寧に拭ってくれた。

お礼を言うと、すかさず片腕で俺を抱えて朝食の席に連れていってくれた。朝から至れり尽くせりである。

朝食の席にちよこんと座った目の前には、できたての小さめな二枚の薄いパンケーキ。ベリーのソースに、空気を含ませた軽いバター。横には自分で好きなだけ垂らせるように森林蜂蜜の瓶が添えられている。

木のカップには、新鮮な我が家裏の泉の聖水、それから果物の搾りたて果汁にバターミルクを注ぎ森林蜂蜜で甘味を足された物が並んでいた。

クヴァルさんに渡した魔法の袋に、また食材を入れておかねば。昨夜いっぱい使っただろうし……

【妖精の箱庭】を出る時に収納した食料は、クヴァルさんが持っている時間停止なしの魔法の袋に小出しに移している。まとめて移すと腐っちゃうからね。そこからクヴァルさんがバターやジャム、飲み物などをチョイスしてくれていた。

立ち読みサンプル
はここまで